政界人脈

バイデン政権初の米ＡＳＥＡＮ外相会議開催
ブリンケン米国務長官のカンターパートたち

バイデン米政権では初めてとなる「米国・東南アジア諸国連合(ASEAN)外相会議」が7月14日、オンライン形式で開かれた。アントニー・ブリンケン米国務長官とASEAN加盟10カ国の外相は、インド太平洋地域での安全保障面での連携や新型コロナウイルス対策での協力を確認し、クーデターで軍事政権が権力を握ったミャンマー情勢についても協議した。ブリンケン氏は、東南アジア地域で影響力を拡大する中国を睨み、バイデン政権のASEAN重視の姿勢を印象付けた。

米ASEAN外相会議は当初、5月25日にオンライン形式で開く予定だったが、中東に向かっていたブリンケン米国務長官が機内の通信障害で参加できずに延期になった経緯がある。

米国務長官「ASEANと戦略的連携」

「仕切り直し」となった7月14日の米ASEAN外相会議で、ブリンケン氏は「インド太平洋地域でのASEANの役割は重要だ」と強調し、戦略的な連携強化を模索した。特に、中国が海洋進出を強める南シナ海の情勢について、「中国の違法な海洋権益の主張を拒否する」と述べ、「米国は中国の威圧に向き合う東南アジアを支持する」と強調した。

フィリピンのロクシン外相は協議の中で、南シナ海での中国の主権主張を退けた2016年7月の仲裁裁判所(オランダ・ハーグ)裁定を米国が支持していることについて「歓迎する」と言明した。

また、ミャンマー情勢について、ブリンケン氏はクーデターに「深い懸念」を表明するとともに、ミャンマー軍事政権のトップであるミン・アウン・フライン国軍司令官も出席した、4月24日のASEAN臨時首脳会議(対面式)で当事者間の対話促進やASEAN特使のミャンマー派遣などで合意したことを「重要な前進」と評価した。ただ、ミャンマーの軍事政権に対し説明責任を負わせると共に、ASEAN側には特使の任命などで「即時の行動」をとるように釘を指した。

米国への信頼回復図る

一方、ブリンケン氏は、新型コロナ対策でのASEANとの協力を強調するとともに、気候変動問題で各国が大胆な行動を取ることの重要性を指摘した。

同氏は、今回の会議を通じて、ASEANの首脳会議欠席などで「ASEAN軽視」の姿勢が顕著だったトランプ前政権で失った米国への信頼回復を図ることに最大限務めたといえる。

インドネシアのルトノ外相は今回の外相会議終了後の声明で、「米国の多国間主義への回帰を歓迎する」と表明した。

ASEAN側には(「親中傾向」が強い一部の国々を除いて)、強圧的な姿勢が目立つ中国を牽制するためにも東南アジアでの米国の安全保障面でのプレゼンスは不可欠だとの認識があるものの、バイデン政権がどの程度本気でASEANを支援してくれるのか見極めようとの慎重な姿勢があることも事実だ。

一方、中国の王毅国務委員兼外相は6月7日に、中国南西部の重慶にASEAN各国の外相を招いて対面形式での中国ASEAN特別外相会議を主導し、ASEAN各国への経済支援や新型コロナウイルスの「ワクチン外交」をテコにASEANへの影響力拡大を図った。米国はASEANとの外相会議の開催では後れをとる形になった。

〔ＡＳＥＡＮ各国の外相たち〕

《ラオス》

■外相 Minister of Foreign Affairs

サルームサイ・コンマシット Saleumxay Kommasith

7月14日の米ASEAN外相会議では、ラオスが「ASEAN・米国対話関係調整国」を担当している立場からブリンケン米国務長官とともに共同議長を務めた。但し、「親中派」ラオスの外相だけに、同会議では儀礼的な議長役に徹した感がある。

＊駐米経験(2度)がある元キャリア外交官で「知米派」ではある。

▼データ：【年齢】52歳(1968年10月31日生まれ)【生地】北部・フアパン県【政党】ラオス人民革命党(LPRP)：中央委員【学歴】(ロシア)モスクワ国立国際関係大学文学修士、(豪)モナシュ大学文学修士(国際研究学・開発学)【経歴】外務官僚：1992年外務省入省：欧米局などで勤務。2000年(ニューヨーク)国連ラオス政府代表部２等書記官、03年外務省国際機関局国連課課長、04年同局副局長、07年同局長。11年外務次官。12年(ニューヨーク)国連代表部大使。14年副外相。16年4月(トンルン内閣)外相、21年3月(パンカム内閣)外相に再任(ー現在)【家族】既婚。子供は2女。

《タイ》

■副首相兼外相 Deputy Prime Minister & Minister of Foreign Affairs

ドン・プラマットウィナイ Don Pramudwinai

米ASEAN外相会議での協議については、「自由で開かれたインド太平洋」の理念を「米国側が強調した」として、「ASEANは主要な当事者が再接触し『ウィンウィンの関係』を促進する仲裁地になり得る」との声明を出した。華人政治家・経済人が多く、中国との経済関係が深いタイだけに、中国を徒に刺激したくないとの思惑がみてとれる。

＊外交官養成の名門・米タフツ大学フレッチャースクールで修士号を取得した元エリート外務官僚。

▼データ：【年齢】71歳(1950年1月25日生まれ)【学歴】チュラロンコーン大学卒(理学士)、(米)カリフォルニア大学(LA)修士(国際関係論)、(米)タフツ大学修士(国際関係論)【経歴】1974年外務省入省：大臣官房、ASEAN局で勤務。81年(ボン)駐西ドイツ大使館1等書記官、84年同参事官。85年本省政治局東南アジア部長。88年駐英公使。92年東アジア局長。94年駐スイス大使。99年情報局長兼外務省報道官。2001年駐中国大使。04年駐欧州連合(EU)大使。07年(ニューヨーク)国連大使。09年駐米大使を最後に10年定年退官。14年9月(プラユット軍事政権)副外相、15年8月(同改造内閣)外相。19年7月(第2期プラユット政権)外相に再任。20年8月12日(同政権改造内閣)副首相兼外相(ー現在)【家族】ナリラット(Narirat)夫人。

《マレーシア》

■外相 Minister of Foreign Affairs

ヒシャムディン・フセイン Hishammuddin Tun Hussein

米ASEAN外相会議では、「米国の前政権では多国間主義が主要な焦点ではなかったと理解している」として、「バイデン政権が多国間協力を受け入れることは歓迎すべき進展だ」と発言。

＊20年2月の「政変」で「統一マレー国民組織(UMNO)」がムヒディン現政権の連立与党に返り咲いたことに伴い、2年ぶりに外相として閣僚に復帰。

＊英国で弁護士としての教育を受けた、王族の血筋を持つ「政界のプリンス」的存在。父のフセイン・オン氏は第3代首相(在任：1976ー81年)を務めた。

▼データ：【年齢】60歳(1961年8月5日生まれ)【生地】(旧マラヤ連邦)スランゴール州プタリンジャヤ【政党】統一マレー国民組織(UMNO)【学歴】(英)ウェールズ大学卒(法学士)、(英)ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)法学修士(商業・会社法)【経歴】弁護士(法律事務所に勤務)を経て、1995年下院議員に初当選(現在まで連続6回当選)。1998年(第1次マハティール政権)副第一次産業相。99年青年・スポーツ相。2004年(アブドゥラ政権)教育相。09年4月(ナジブ政権)内相、13年5月国防相兼運輸相代行、14年6月国防相(運輸相代行解任)。16年4月ー18年5月国防相兼首相府特命相。20年3月10日(ムヒディン政権)外相(ー現在)【家族】パハン州王室の王女であるマルシラ(Marsilla Tengku Abudullah)夫人との間に2男2女。

《シンガポール》

■外相 Minister for Foreign Affairs

ビビアン・バラクリシュナン Dr Vivian Balakrishnan

米ASEAN外相会議終了後に、自身のツイッターで「建設的な話し合いができた」と総括したが、新型コロナ後の経済再建、ワクチンの備蓄・配給、デ

ジタル化、サイバーセキュリティ、地球温暖化問題でのASEAN・米国関係強化への言及はあるものの、南シナ海問題などの安全保障問題についてのコメントは避けている。
＊中国国営新華社で中国・シンガポール関係の重要性や良好さを強調したインタビューなどが報道されることが多い。
＊5回生国会議員(ホランド・ブキティマ集団選挙区)。政界入りする前は著名な眼科医で、シンガポール総合病院最高経営責任者(CEO)を務めていた。
▼データ：【年齢】60歳(1961年1月25日生まれ)【生地】シンガポール【人種】インド(タミール)系【宗教】キリスト教【政党】人民行動党(PAP)：中央執行委員【学歴】国立シンガポール大学(NUS)医学部卒(MBBS)、同大学医学修士(眼科学)【経歴】1986年シンガポール国軍(SAF)衛生官。93年から(英ロンドン)モーアフィールド眼科病院などで勤務医。99年シンガポール総合病院最高経営責任者(CEO)。2001年11月総選挙で国会議員に初当選(現在まで連続5回当選)。02年(ゴー・チョクトン政権)国務相(国家開発)、03年国務相(国家開発・通産)。04年(第1次リー・シェンロン政権)社会開発・青年スポーツ相代行兼国務相(貿易産業)、05年社会開発・青年スポーツ相兼第二貿易産業相。06年(第2次リー政権)社会開発・青年スポーツ相兼第二情報通信・芸術相、08年社会開発・青年スポーツ相。11年(第3次リー政権)環境・水資源相。15年10月(第4次リー政権)外相。20年7月25日(第5次リー政権)外相に再任(―現在)【家族】ジョイ(Joy)夫人との間に4子。

《ブルネイ》

■第二外務通商相 Second Minister of Foreign Affairs and Trade
エルワン・ユソフ Erywan Mohd Yusof
ブルネイ政府では外相はボルキア国王が兼任しているため、ASEAN外相会合などの国際会議では実質的な「外相」(諸外国の外相のカウンターパート)の責務を果たす。
＊2005年に外務通商省に異動するまでは、産業資源省で技官を務めた応用遺伝学の専門家。
▼データ：【学歴】(英ウェスト・ヨークシャー州)リーズ大学卒(遺伝学・生物物理学)、］(英ウェールズ)スウォンジー大学理学修士(遺伝学・応用遺伝学)【経歴】1989年産業資源省入省(畜産化学技官)。91年雑農作物課長。94年ASEAN Agriculture Matters担当官。2005年外務通商省国際通商局に異動し、08年同省事務次官。15年10月副外務通商相。18年1月30日］(内閣改造)第二外務通商相(―現在)

《インドネシア》

■外相 Minister of Foreign Affairs
ルトノ・マルスディ Retno Lestari Priansari Marsudi
米ASEAN外相会議の終了後に「米国の多国間主義への回帰を歓迎する」との声明を発出(インドネシアはASEANの「大国」を自任する立場からも、東南アジア地域の安全保障面で中国の影響力とのバランスをとるために米国の相応のプレゼンスを歓迎するのは本音だろう)。
＊ASEANの他の外相に先駆けてミャンマー問題の解決に乗り出し、2月24日にはミャンマー軍事政権に任命されたばかりのワナ・マウン・ルイン外相とバンコクのドンムアン国際空港内で会談。
＊キャリア外務官僚で前駐オランダ大使。2014年10月の第1期ジョコ・ウィドド(通称ジョコウィ)政権発足時にインドネシア初の女性外相に抜てきされた。
▼データ：【年齢】58歳(1962年11月27日生まれ)【生地】中ジャワ州スマラン【学歴】ガジャマダ大学卒(国際関係論)、(オランダ)ハーグ応用科学大学修士(国際・欧州法)、(ハーグ)クリンゲンダール国際関係研究所外交官研修課程修了【経歴】1985年外務省入省：97年駐オランダ大使館(ハーグ)1等書記官、2001年本省欧州・アメリカ総局部長を経て、03年西ヨーロッパ局長。05年駐ノルウェー大使。09年欧州・アメリカ総局長。12年駐オランダ大使。14年10月(第1期ジョコウィ政権)外相。19年10月23日(第2期ジョコウィ政権)外相に再任(―現在)【家族】夫君はアグス(Agus Marsudi)氏。子供2人。

《フィリピン》

■外相 Secretary of Foreign Affairs
テオドロ・ロクシン Teodro Locsin Jr.

米ASEAN外相会議で、「米国(ブリンケン国務長官)が(南シナ海の領有権問題で)フィリピンの主権保護を確認してくれたことに感謝する。これは東南アジアの文脈では平和と安定の維持を意味する」と発言。
＊2018年10月に現職(外相)に就任。前職は国連フィリピン政府代表部大使。弁護士、実業家、ジャーナリスト、テレビ番組司会者、下院議員(首都圏マカティ市：連続3期)、外交官と実に多彩な経歴と能力の持ち主として知られる。
▼データ：【年齢】72歳(1948年11月15日生まれ)【生地】マニラ市【政党】PDP-ラバン(フィリピン民主党-国民の力)【学歴】アテネオ・デマニラ大学卒(法学士)、(米)ハーバード大学法学修士【経歴】週刊誌論説委員、法律事務所アソシエート(弁護士)、大手銀行会長事務補佐官などを歴任。86年(コラソン・アキノ政権)大統領報道官(―87年)、大統領首席法律顧問。88年日刊紙「The Daily Globe」発行人。93年日刊紙「Today」発行人・編集局長(―2005年)。94年大手テレビ局ABS-CBNの報道番組「Assignment」アンカー(―2003年)。2001年6月下院議員(連続3期：マカティ1区)(―10年6月)。11年ABS-CBNの報道番組「The World Tonight」アンカー。17年4月フィリピン国連代表部大使。18年10月17日(ドゥテルテ政権)外相(―現在)【家族】マリア(Ma. Lourdes Barcelon)夫人とは再婚。子供4人。

《ベトナム》

■外相 Minister of Foreign Affairs
ブイ・タイン・ソン Bui Thanh Son
米ASEAN外相会議で、「東海」(南シナ海のベトナムによる名称)の領有権問題で、関係諸国が国際法を遵守する必要性を強調するとともに、「東海」での航行の自由を保証するために米国が建設的な役割を果たすことへの期待を表明した。
＊元外務官僚で外務次官を経て、21年4月に大臣に選任。流暢な英語の他に日本語も話す。
▼データ：【党務】中央委員【年齢】58歳(1962年10月16日生まれ)【生地】ハノイ市ナムトゥリエム区【人種】キン族【政党】ベトナム共産党(CPV)：中央委員【学歴】1984年ベトナム外交大学(現・ベトナム外交学院)卒、93年(米)コロンビア大学修士(国際関係論)【経歴】外務官僚：1987年外務省国際関係研究所研究員、96年同副所長。2000年駐シンガポール大使館公使参事官。03年本省外交政策計画総局副局長、08年外務次官補兼外交政策計画総局長。09年11月外務次官、16年7月筆頭外務次官。21年4月8日外相(―現在)【家族】既婚。子供は1女。

《カンボジア》

■外務・国際協力相 Minister of Foreign Affairs and International Cooperation
プラク・ソーコン Prak Sokhon
2016年4月から現職(外務・国際協力相)。
▼データ：【年齢】67歳(1954年5月3日生まれ)【生地】プノンペン【政党】カンボジア人民党(CPP)：中央委員【軍歴】陸軍大将【学歴】(プノンペン)法学士、(ハンガリー・ブダペスト)国際ジャーナリスト養成学院学位、(仏パリ)国際行政学院学位【経歴】1979年(プノンペン政府)軍入隊：93年カンボジア王国軍情報部長。(フン・セン)首相顧問。99年駐仏大使。2003年カンボジア王国政府副官房長。04年閣僚評議会長官。09年首相府相。13年9月(第4次フン・セン政権)郵便・電信相。16年4月(同改造内閣)外務・国際協力相。18年9月(第5次フン・セン政権)外務・国際協力相に再任(―現在)【家族】既婚。子供3人。

《ミャンマー》

■外相 Minister for Foreign Affairs
ワナ・マウン・ルイン U Wunna Maung Lwin
米ASEAN外相会議では、2月1日の国軍によるクーデターの正当性を主張するとともに、軍事政権が提示している「複数政党制に基づく民政復帰」に向けた5項目の「ロードマップ(行程表)」を説明し、米国と他のASEAN加盟国の理解を求めた。
＊ミン・アウン・フライン国軍司令官(上級大将)が率いる軍事政権の意思決定機関「国家行政評議会(SAC)」がクーデター実行の当日(2月1日)に発令した閣僚人事で現職(外相)に就任。
＊旧軍政の「亜流政権」とみられた、2011年発足のテイン・セイン政権(―16年)でも外相を務めた。それ以前は10年以上にわたって欧州諸国・国連機関などの大使を務めていたが、生粋の外務官僚ではなく、実際は、佐官時代に外務省に「出向」した元陸軍将校。
▼データ：【年齢】69歳(1952年5月30日生まれ)【生地】モン州タトン【学歴】国軍士官学校(DSA)卒(理学士)【軍歴】元大佐【経歴】1971年陸軍に入隊：陸軍の各部局・部隊の要職を歴任後、98年国防省(大佐)から国境問題省に転出(局長)。2000年外務省に異動し、駐イスラエル、駐UNESCO、駐仏、駐ベルギー各大使などを歴任。07年(ニューヨーク)国連代表部大使。11年3月―16年3月(テイン・セイン政権)外相。21年2月1日(軍事政権)外相に返り咲く(―現在)。

(アジア・リンケージ　勝田悟)